

(1) 大学・学科の設置理念

①大学

東京農業大学は国内外でも類を見ない農学系の総合大学として、人類生存の基盤となる農業およびその関連産業を支える学問である農学、生命科学、環境科学、バイオ産業学など農学全般の教育研究に取り組んでいる。東京農大精神は「質実剛健」「独立不羈」「自彊不息」で、今日的に言えば「物質主義に溺れることなく、心身ともに健全で、いかなる逆境にも挫けない気骨と主体性の持ち主たれ」ということである。また本学のモットー「実学主義」は、社会が実際に必要とする研究を重視する実用的で実際的な学問のあり方を意味する。

②学科等（教職課程を有する学科のみ）

多様な陸圏領域の教育・研究が実践できるように配置した植物系、動物系、資源・環境系の分野において、新しい生物資源の開発や多様な環境に配慮した生物生産力の拡大、生物資源機能の新しい応用等にかかわる理論と技術を教育研究し、国際的な視点で地域産業の発展に貢献できる人材を養成する。

(2) 教員養成に対する理念・構想

①大学

初代学長横井時敬は「人物を畑に還す」と言った。この言葉通り本学は開学以来全国から若者を集め、地域に貢献する人物となるよう教育してきた。教員養成においても同様で、履修者が卒業後に全国各地で教育者として活躍することを目標とし、この東京農大精神と実学主義のもと、豊かで実践的な知識と技能を身につけた心身ともに健全な教員の養成を目指している。

今日、生命科学は進歩が速く、農学や環境科学における社会からの期待が大きい。本学教職課程ではこのような動向を踏まえ、学部段階では学科の基礎と教員としての基本的・実践的な知識と技術を習得させる教育を行う。

②学科等

本学の理念である“実学”の精神を授業に取り入れ、現場に強い農業教員を養成できるように努めている。すなわち、農業高校における座学の講義だけでなく、実験実習、実習、学校および農場の維持管理作業、生徒指導、課外活動まで、主体的・実践的に指導できる農業教員を養成できるように努めている。

さらに、昨今の教育課題である「心の教育」やいじめ、引きこもりなどの人間関係に起因する諸問題に本学科の特色を活かして適切に対応できる教員、「食育」などを含めた総合的な学習の時間や環境教育の指導に意欲的に取り組む教員、体験不足や理科離れの解消に向けて、勤務校だけでなく、広く地域に向けて努力する教員の育成を目指している。

(3) 認定を受けようとする課程の設置趣旨（学科等ごと）

生物産業学部は広く地域産業の発展と地域文化の向上に寄与する技術者および経営者の養成を図ること目的に、生物産業の研究立地として優れており、現場に密着した教育が可能な北海道網走市に設置されている。当学部は生物産業を生産、加工、流通の3分野で捉え、それぞれが技術と係わるので、技術として生物生産学科、アクアバイオ学科、食品香粧学科、経営に関わる学科と

して地域産業経営学科を設けて教育研究を行っている。生物生産学科は農業、林業、畜産業の生産に係わる学問分野、生物資源の保全に係わる学問分野について分担しており、フィールドと実験室の両者に強い人材の育成を目指している。その背景には分化した生産理論よりも、動物、植物、生態、さらにはバイオテクノロジーの手技も含めた総合的な生産技術を理解している技術者に対する社会的なニーズに応える目的がある。

本学科の教育の特色としては、農業、畜産業、林業、豊かな自然生態がすぐその近傍にあるため、それを生かした教育・研究である。生産現場や自然の中で体を動かしながら感覚として理解するための実習、それらを理論として理解するための講義や理解するための手法を学ぶ実験実習が配当されている。こうしたカリキュラムの構成により、生態系レベルから遺伝子やタンパク質などの分子レベルまでの体験と学習を科目として配している。

教育システムとしては、

①全学共通科目に導入科目（フレッシュマンセミナーなど）、課題別科目（インターナショナル・スタディーズなど）、語学教育、スポーツ関係科目、リメディアル科目（基礎生物など）がある。これらを通して大学生活への導入を図ると同時に、基礎的な教養を身につける。

②学部共通科目に専門共通科目として生物産業学概論、生物産業体験実習、バイオテクノロジー概論、学際領域科目として現代環境論がある。これらの講義や実習を通して、生物産業の全体的なイメージを体験すると同時に理解する。

③学科の専門教育科目としては生物資源概論、生物資源各論、計量生物学、細胞生物学、生態学、分子生物学、バイオケミストリーなどが配置されている。これらは農業、林業、畜産業の生産、生物資源の保全に係わる専門科目を実践的に理解するための基礎となっている。

④学科の専門コア科目は2年および3年次に配当されている。2年次では植物生産分野に関わるものとして作物学と植物分子生理学、動物生産分野に関わるものとして動物生産管理学、動物バイオテクノロジーなど、生物資源保全分野に関わるものとして森林環境科学、動物遺伝学などが配置されている。これらによって専門分野における理論の理解を深め、3年次に所属する分野、研究室について考える機会とする。3年次になると植物生産分野、動物生産分野、生物資源保全分野におけるいずれかの研究室に所属する。3年次では分野ごとに実施する専門コア科目の植物生産学、動物生産学、生物資源保全学に加え、自由に履修できる専門コア科目の資源植物学、動物行動学、育林学などが開講され、4年次に実施する卒業論文の基礎を作る。

⑤本学では4年次における卒業論文は必須であり。それによって社会人として生きていく上で極めて有用なPDCAサイクルを生物生産に関わる研究で実践して学ぶ。3年次には各研究室における生物生産学特別実験・実習と生物産業学演習で、卒業論文作成に向けて専門的な研究上の手法と考え方を学ぶ。

《目指す農業の教員像》

学習指導要領に示されている農業教育の目標を性格に把握し、「心の教育」をはじめとする生徒指導、教育相談も忘れず、本学の教育理念である“実学”の精神を通じて、実験や実習における観察や体験を体系立てて理論も踏まえながら指導し、さらには社会ニーズである食育や食の安全・安心についても農業を介して教育して欲しい。本学科において培った知識により、農業の技術だけでなく、役割や意義についても生徒達に伝えることのできる教職者としての意識の高い農業教員の育成を目指している。